

生活

自然のなかの神学校

農村伝道神学校は新宿より1時間半、町田市の郊外、雑木林や畑が散在する自然の豊かな地にあります。校内には実習農場、畑、竹林、栗林があり、自然に囲まれ土に親しみながら学生生活をしています。ストーン記念館（校舎）、礼拝堂、食堂、寮、図書館などの施設があります。鶴川学院が神学校と共に運営する鶴川シオン幼稚園の子どもたちは、毎日神学校にやって来て運動場や野原を飛び跳ねています。

学校礼拝

礼拝は週2回行なわれ、学生・教師・講師が共同で礼拝をつくりあげています。聖書に聞きながら経験や学びを分かち合うときです。

実習

宣教の現場を体験するために教会実習、社会実習などを夏期に行なっています。農村教会、農村社会、様々な課題を担うセンターでの実習に加えて、アジア学院での農業実習を選択することもできます。

台湾・玉山神学院との交換交流

台湾先住民族の神学校である玉山神学院と様々な交流をし、互いに学びあっています。実習として夏には相互に隔年で学生の交換交流を行っています。

教会生活

教会生活を重んじ、出席教会の働きに積極的に参加することが求められています。

共同生活

伝道者養成にとって共同性を養うことは、教育の大きな課題であり、その大切な場として寮が用意されています。

2023年度入学要項

◆受験資格

- (1) 日本基督教団に限らずプロテスタント教会に所属し、原則として受洗後1年以上（洗礼式を行わない教派については、それに準ずる）の教会生活をしている者。
- (2) 所属教会が推薦し（可能であれば）、高卒または同等以上の学力を有すると認められる者。

◆修業年限

○神学基礎コース：2年間（2年間で修了することも可）。

基礎コース修了後、神学専門コースに進むことができる。

○神学専門教職者養成コース：2年間

○神学専門信徒宣教者養成コース：1年間または2年間

◆学費

入学金 60,000円（入学時のみ）

授業料 240,000円（年額）

設備費 30,000円（入学時のみ）

◆受験手続

次の書類を期日までに郵送または持参する。

- (1) 入学願書（本校指定の書式）
- (2) 履歴書（本校指定の書式）
- (3) 教会（牧師または役員会）の推薦書（可能であれば）
- (4) 最終学校卒業証明書（または卒業見込み証明書）
- (5) 受験料 10,000円（振り込み）

◆入学願書受付

第1回2022年10月18日（火）～11月4日（金）

第2回2023年 1月17日（火）～ 2月3日（金）

◆入学試験日時

第1回2022年11月15日（火）午前9時～午後3時

第2回2022年 2月14日（火）午前9時～午後3時

◆会場 本校教室

◆入学試験科目

(1) 小論文 (2) 旧約聖書・新約聖書 (3) 面接

◎入学願書一式、過去の試験問題集は、本校事務室まで請求ください（無料）。

学校法人 鶴川学院

農村伝道神学校

日本基督教団認可神学校



〒195-0063
東京都町田市野津田町2024番地
TEL (042) 735-5775
FAX (042) 735-5711

郵便振替口座
加入者名：学校法人鶴川学院
00140-7-635524
Eメール:noden @ pony.ocn.ne.jp
<https://noden.ac.jp/>

創立

農村伝道神学校の新校舎は創設者アルフレッド・ラッセル・ストーン宣教師を記念して建てられました。カナダの農村生まれのストーン先生は1927年、日本への宣教の使命を受け来日し、1954年に洞爺丸の沈没により52歳で亡くなられるまで27年間宣教師として働きました。その生涯を振り返るとき、ストーン先生は最後まで農民であり続けたといえます。ストーン先生は農民として農村に生き、そこに働きの場を求めました。生活苦にあえぐ農民の魂と生活の向上を願い、農民と苦楽を共にし、一農民になり切ろうとしました。

土の中から出たような先生は土と共に生きる人を自分の分身のように接し愛したのです。ストーン先生は文化も習慣も違う日本にあって、日本家屋を愛し、集会では囲炉裏を囲んで座り日本食を食べ、流暢な日本語で語り合ったといわれています。農民の集まりにもう一人、近所の農民が加わったような感じでした。そこで、生活や農業や社会の変革のことが話が話し合われたと想像されます。ストーン先生は一人の人間を大切にし、一人にかかわり続けましたが、同時に個人を取り巻く社会の改善や変革を求めています。ここに教会の使命を見出したのです。

「社会的救済とは、個人の救済に適うよう社会状態を変える事を意味する。」ストーン先生の言葉です。

福音は社会から切り離された個人ではなく、一人の人間を大切にしつつ、その人の家族や経済も含めより良い社会を求めて教会が社会にかかわっていくことでした。

教会がこのような「社会的救済」を担うためには指導者の養成が急務でした。ここに農村伝道神学校のルーツがあります。

